

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長


令和2年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第8号（11月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所	
〒899-3401	
南さつま市金峰町大野 2200	テレホンサービス
Tel 099-245-1081（代表）	鹿児島 099-296-6430
099-245-1157（直通）	296-6431
099-245-1149（FAX）	

ホームページアドレス：<http://www.jpnp.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp



農薬の安全使用に努めましょう
農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理，安全使用
2. 作物に対する安全 適期，適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
（農薬安全使用基準の遵守）
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
（周辺住民等への危被害防止）
（河川，湖沼，海などへの汚染防止）
（養蚕，養蜂などへの危被害防止）
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

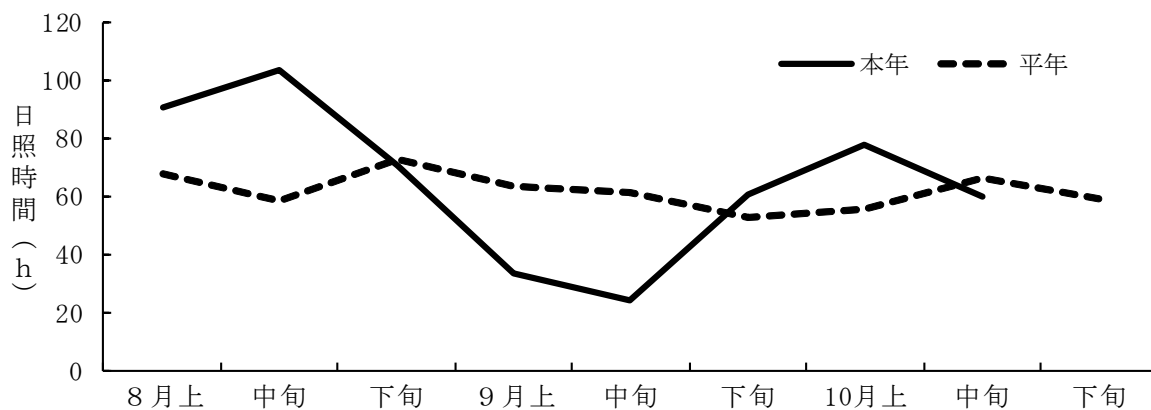
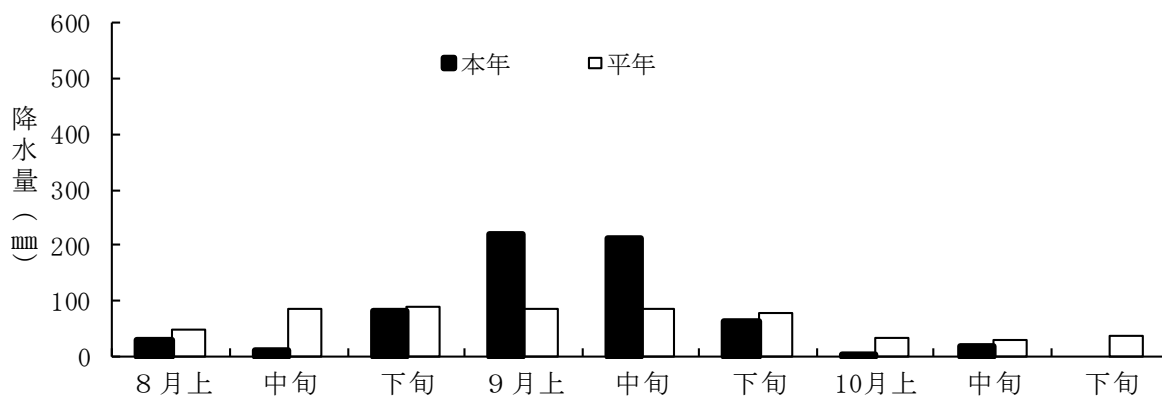
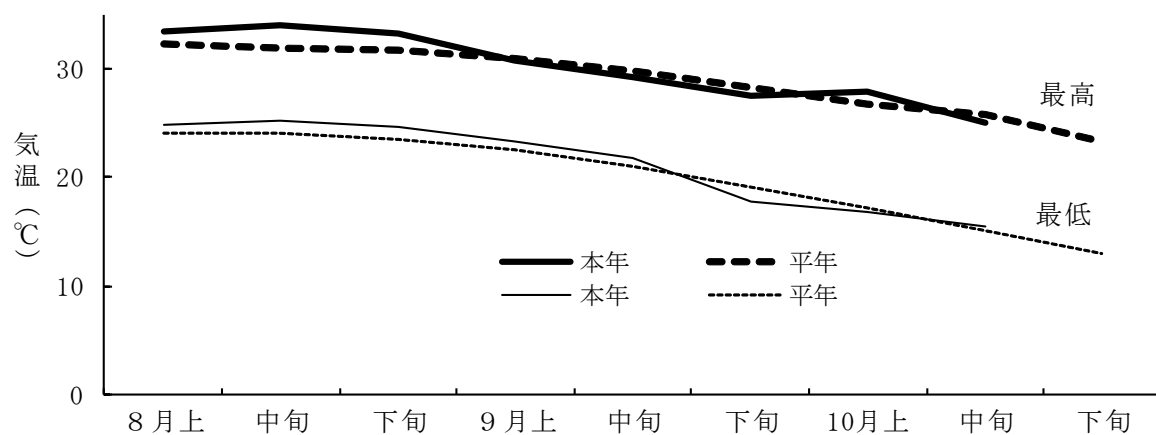
農薬ラベルを確認しましょう。
農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう。

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（10月24日から11月23日） 令和元年10月22日 鹿児島地方気象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	20	30	50	九州南部では、気温は高く、降水量は平年並みか少なく、日照時間は平年並みか多い見込み。奄美地方では、気温は高く、降水量、日照時間は平年並みの見込み。
	奄美地方	20	30	50	
降水量	九州南部	40	40	20	
	奄美地方	40	30	30	
日照時間	九州南部	20	40	40	
	奄美地方	30	30	40	

II. 8～10月の気象情報（鹿児島地方気象台 観測点：加世田）



【病 害 虫 発 生 予 報 の 概 要】

作 物		病 害 虫 名	発 生 量	
			現 況	予 報
野 菜	キュウリ	うどんこ病	少	やや少
	ピーマン	斑点病	並	並
		アザミウマ類	少	やや少
	イチゴ	うどんこ病	少	やや少
		ハダニ類	やや少	並
	エンドウ類	シロイチモジヨトウ	やや少	並
		ハモグリバエ類	やや少	並
		アザミウマ類	並	並
	野菜共通	ハスモンヨトウ	やや多	やや多
	花 き	キ ク	アザミウマ類（県本土，施設）	並
〃（奄美地域，露地）			並	やや多
ハダニ類（県本土，施設）			やや少	並
果 樹	カンキツ	かいよう病（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	少	やや少
		〃（奄美地域）	並	並
		果実吸蛾類（県本土・熊毛地域）	多	多
茶 樹	チャ	カンザワハダニ	並	やや多

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 野 菜

1. キュウリ

(1) うどんこ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

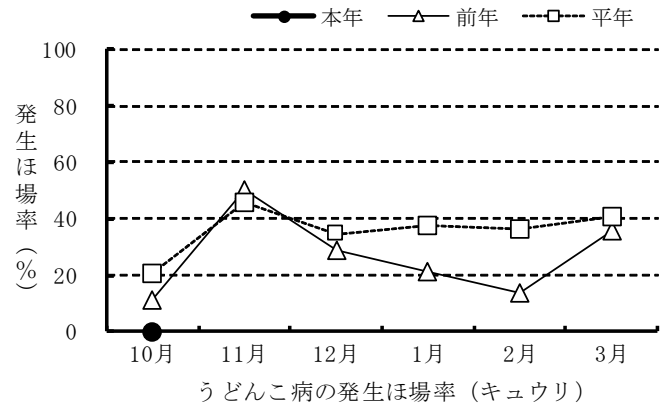
- (ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率0%（平年20%）
：低い（－）

(イ) 気象予報

- 気温：高い（＋）
- 降水量：平年並みか少ない（＋）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発病葉は早めに除去し、ハウス外に持ち出して処分する。
- (イ) 多発すると防除が困難になるので、早めに防除する。
- (ウ) 薬剤は下位葉や葉裏に十分かかるよう散布する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



2. ピーマン

(1) 斑点病

ア 予報内容

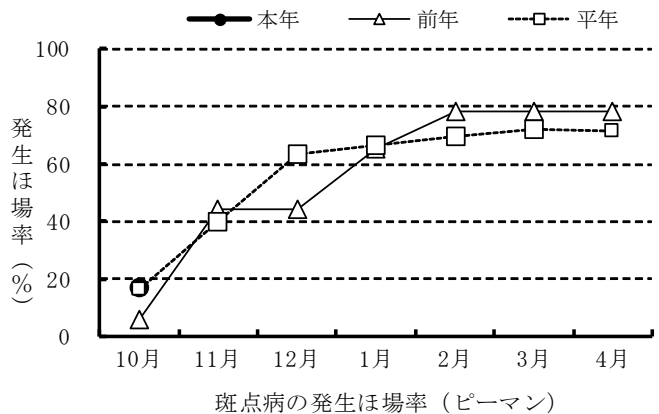
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率17%（平年16%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。
- (イ) 発病葉は早めに除去し、施設から持ち出して処分する。
- (ウ) 草勢低下により発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

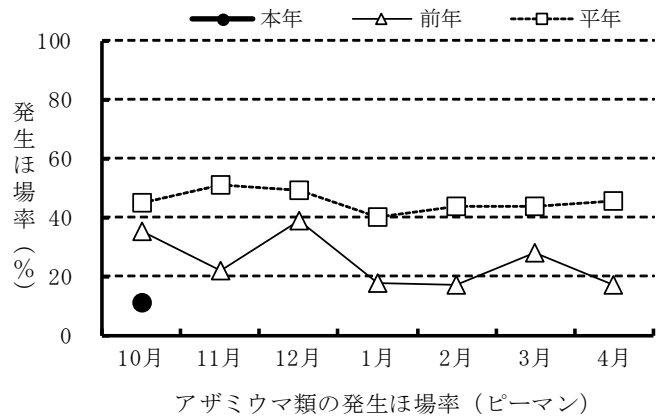
- (ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率11%（平年45%）
：低い（－）

(イ) 気象予報

- 気温：高い（＋）
- 降水量：平年並みか少ない（＋）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウスの開口部（出入り口やサイド付近）等に青色粘着トラップを設置し、早期発見と初期防除に努める。
- (イ) 花や新芽の中など、薬剤のかかりにくい場所に生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。
- (ウ) スワルスキーカブリダニの放飼は、アザミウマ類の発生がなく、着花数が多い時期に行う。
- (エ) 放飼後はチャノホコリダニやアブラムシ類の発生に注意し、発生時にはスポット散布など早めの対策を講じる。なお、防除を行う場合は、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。



3. イチゴ

(1) うどんこ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

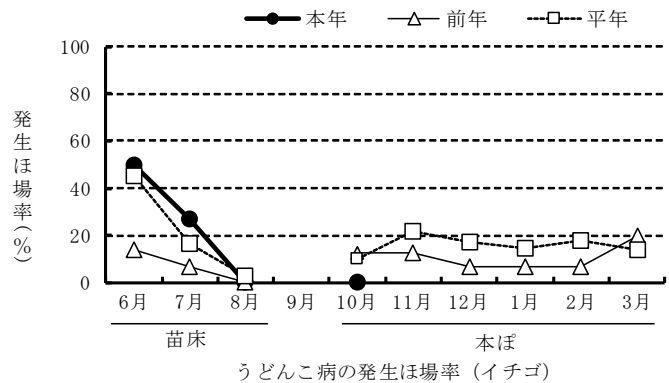
- (ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率0%（平年20%）
：低い（－）

(イ) 気象予報

- 気温：高い（＋）
- 降水量：平年並みか少ない（＋）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 防除は予防に重点を置き、上位葉に発生しやすいので、葉裏をよく観察し、早期発見と初期防除に努める。
- (イ) 薬剤は、葉裏に十分かかるよう散布する。
- (ウ) 窒素肥料の過多や葉が混み合うと多発しやすくなるので、適切な栽培管理を行う。
- (エ) 発病葉や発病果などは早めに除去し、施設から持ち出して処分する。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率20% (平年32%)

: やや低い (-)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

降水量：平年並みか少ない (+)

ウ 防除上注意すべき事項

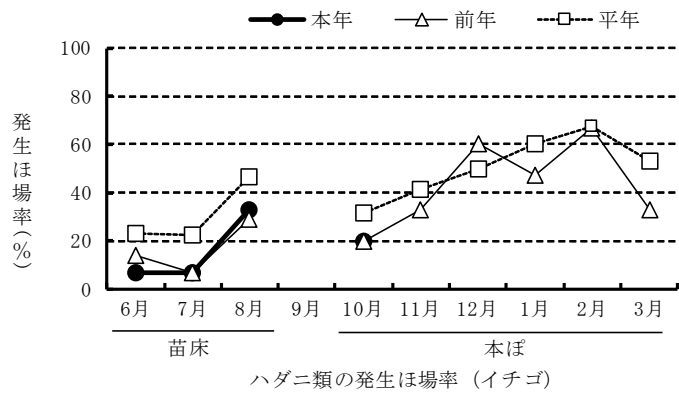
(ア) 薬剤の防除効果をもとめるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。

(イ) 薬剤によっては感受性が低下しているため、散布後は防除効果を確認する。

(ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

(エ) カブリダニ類を天敵に用いる場合は、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

(オ) 薬剤によっては、ミツバチに影響があるので薬剤選定に注意する。



4. エンドウ類

(1) シロイチモジヨトウ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率0% (平年28%)

: やや低い (-)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

降水量：平年並みか少ない (+)

ウ 防除上注意すべき事項

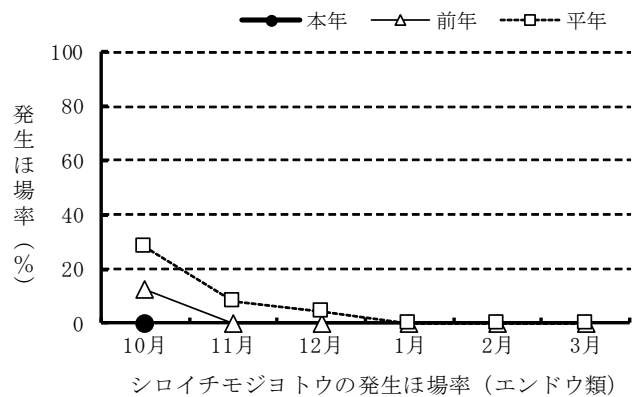
(ア) 卵塊や分散前の若齢幼虫が寄生した葉はその都度摘み取り処分する。幼虫は葉をつづり合わせたり葉の内部に食入し、食害葉は網目状に白く変色するので、これを目安にする。

(イ) 特に生育初期の被害が大きいのでほ場を見回り、寄生葉は見つけ次第摘み取り処分する。

(ウ) 薬剤防除は効果の高い若齢幼虫期に行う。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布に努める。

なお、薬剤は平成29年度技術情報第10号(9月27日付け；ホームページ掲載)を参照。



(2) ハモグリバエ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土
(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

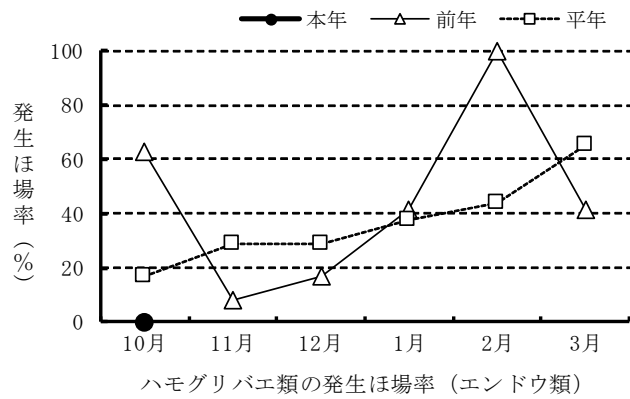
(ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率0% (平年17%)
：やや低い (-)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)
降水量：平年並みか少ない (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) この時期の主な発生種はマメハモグリバエである。
- (イ) 多発してからの防除は困難なので、初期防除に努める。多発ほ場では5～7日おきに連続散布し、徹底した防除を行う。
- (ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土
(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

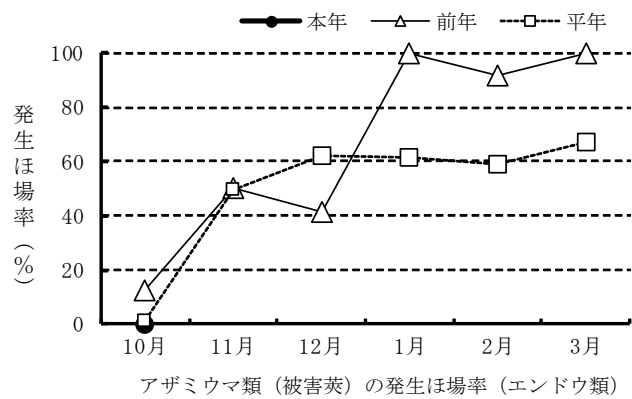
(ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率0% (平年1%) : 並

(イ) 気象予報

気温：高い (+)
降水量：平年並みか少ない (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 主な発生種はハナアザミウマである。幼莢への産卵により白ぶくれ莢を発生させ、商品性を落とす。
- (イ) 青色粘着トラップ等を活用して発生状況を把握し、防除の遅れ・被害拡大とならないように、定期的な防除に努める。
- (ウ) 花卉の奥に寄生し見つけづらいことから、発生に注意し、丁寧な薬剤散布に努める。
- (エ) 多発してからの防除は困難なので、初期防除に努める。多発ほ場では5～7日おきに連続散布し、徹底した防除を行う。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

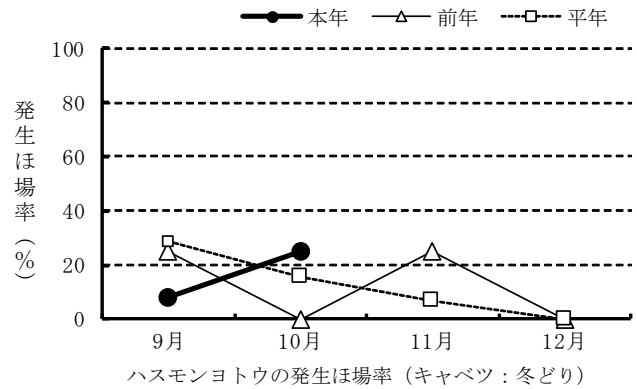


5. 野菜共通

(1) ハスモンヨトウ (令和2年度技術情報第13号(8月27日付け)参照)

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 対象作物 キャベツ等アブラナ科野菜, イチゴ, トマト, 根深ネギ, 豆類(エンドウ類, ソラマメ, サヤインゲン)等
- (ウ) 発生量 やや多



イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

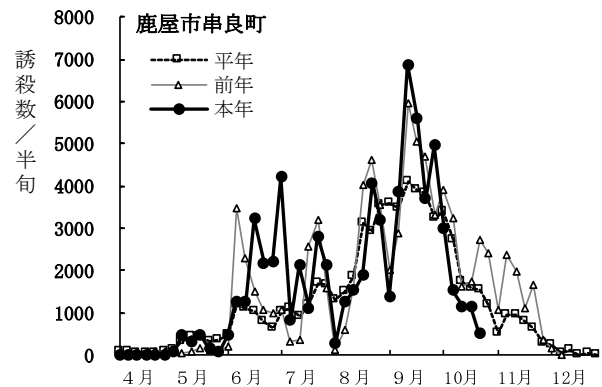
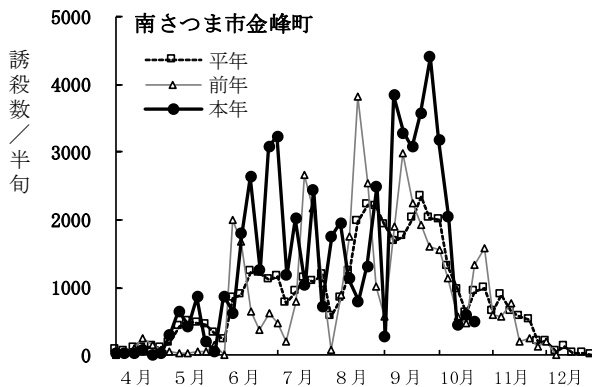
- イチゴでの発生ほ場率53% (平年28%)：やや高い (+)
- キャベツでの発生ほ場率25% (平年18%)：やや高い (+)
- エンドウ類での発生ほ場率13% (平年22%)：並
- フェロモントラップ誘殺数：やや多い (+)

(イ) 気象予報

- 気温：高い (+)
- 降水量：平年並みか少ない (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生状況は、作物や各地域で異なるため、ほ場を見回り、幼虫の発生状況を確認する。
- (イ) 若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害する(白変葉)ので、発生を目安にする。
- (ウ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- (エ) 中・老齢幼虫になると薬剤が効きにくいので、防除は若齢幼虫期に行う。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布に努める。



フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺状況 (10月20日現在)

防除に関する今月の留意事項

1. タバココナジラミ

コナジラミ類の調査結果（10月）

本年の発生はほぼ平年よりやや少ないが、今後の気象は発生に好適な条件になると予報されている。タバココナジラミはトマト黄化葉巻病、キュウリ退緑黄化病及びメロン退緑黄化病の病原ウイルスを媒介し、サヤインゲンに白化莢、トマトに着色異常果を発生させるので、以下の点を考慮した総合的な防除対策に努める。

作物名	発生ほ場率（％）		概 評
	本年	平年	
キュウリ	0	33	少
ピーマン	33	48	やや少
イチゴ	7	14	やや少

- (1) ハウス周辺及び内部の雑草は発生源になるので除草する。
- (2) 侵入を防ぐため、出入り口やサイドなどのハウス開口部には必ず防虫ネットを設置する。
- (3) は種・定植時には粒剤を施用する。
- (4) ハウス内には黄色粘着トラップを設置し、早期発見・初期防除に努める。
- (5) サヤインゲンでは、特に生育初期からの防除を徹底する。
- (6) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (7) 天敵導入後に防除を行う場合は、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。

2. ウリ科野菜類のアザミウマ類

アザミウマ類はキュウリ黄化えそ病やメロン黄化えそ病等の病原ウイルスを媒介する。最近、薬剤感受性が低下している事例もあるので、効果的に防除するには育苗期から生育初期の総合的な防除が重要である。

- (1) ハウス周辺及び内部の雑草は発生源になるので除草する。
- (2) 出入り口やサイドなどのハウス開口部から侵入することが多いので、防虫ネットを展張するとともに、青色粘着トラップ等を設置し、早期発見と初期防除に努める。
- (3) ミナミキイロアザミウマに対して、薬剤の感受性が低下している事例があるので、薬剤の選定には注意する。
- (4) 天敵導入後に防除を行う場合は、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。

3. エンドウ類のごま症対策

スナップエンドウの「ごま症」を引き起こす病害として、うどんこ病菌及び褐紋病菌が影響していることが明らかとなった。うどんこ病、褐紋病は例年11月末から12月にかけて初発が認められる。うどんこ病は1段目の収穫時期から、褐紋病は下葉付近から発生し、生育とともに収穫位置付近まで上位進展するので、防除の遅れ・被害拡大とならないように、以下の点を考慮して防除対策に努める。

- (1) 未発生ほ場では早期発見に努め、既に発生しているほ場では早めに防除を行う。
- (2) 年内から定期的に体系防除を行うと防除効果が高い。
- (3) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

4. カボチャのうどんこ病

樹勢低下や、葉の老化に伴い発生が多くなりやすいので、発病に注意し、予防に努める。

- (1) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (2) 葉の裏面にも発生するので、葉裏まで丁寧に薬剤を散布する。
- (3) 残渣中の子のう殻で越冬するため、収穫終了後の残渣は適正に処分する。

II. 花き（キク）

(1) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土（施設） やや多

奄美地域（露地） やや多

イ 予報の根拠

< 県本土（施設） >

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率30%（平年36%）：並

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

< 奄美地域（露地） >

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率60%（平年40%）

：やや高い（+）

発生程度は低い（-）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ミカンキイロアザミウマ等一部のアザミウマ類はキクえそ病（TSWV）とキク茎えそ病（CSNV）を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見及び初期防除に努める。

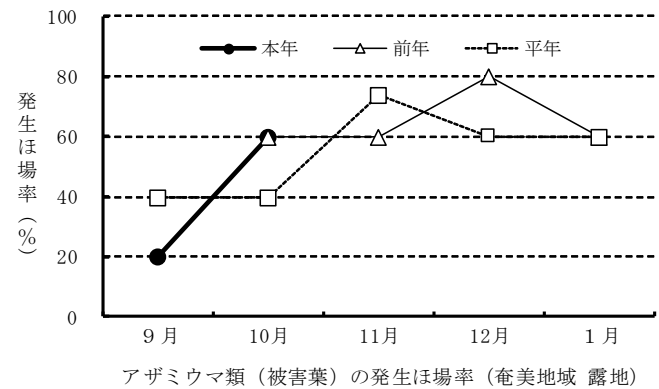
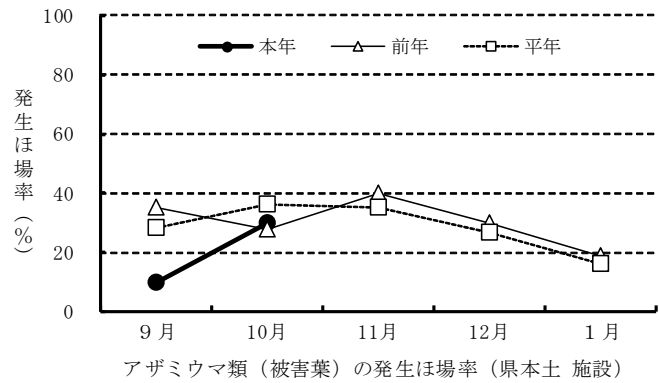
(イ) 発生動向を把握するためには、出入口付近等に青色粘着トラップを設置する。

(ウ) 野外のアザミウマ類は、雑草地等で増殖するので、施設周辺の除草等を行う。

(エ) アザミウマ類は、種によって薬剤に対する感受性が異なるので、薬剤の選定に注意する。

(オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(カ) クロゲハナアザミウマは中下位葉にも寄生しているため、薬剤は下葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率30%（平年39%）

：やや低い（-）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

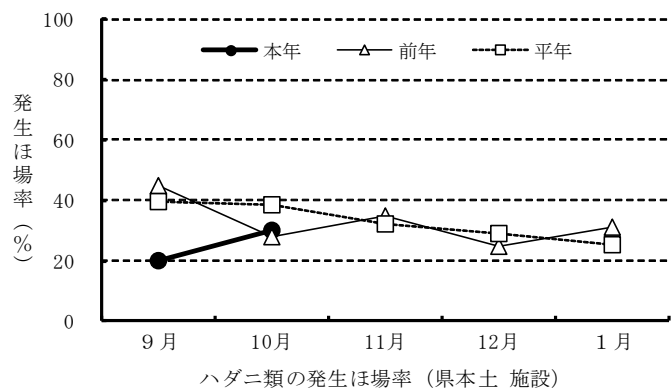
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する機会が多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と初期防除に努める。

(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。

(ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



Ⅲ. 果 樹

1. カンキツ

(1) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) やや少

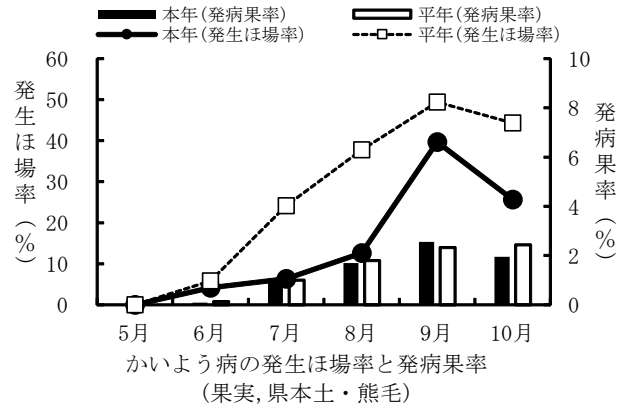
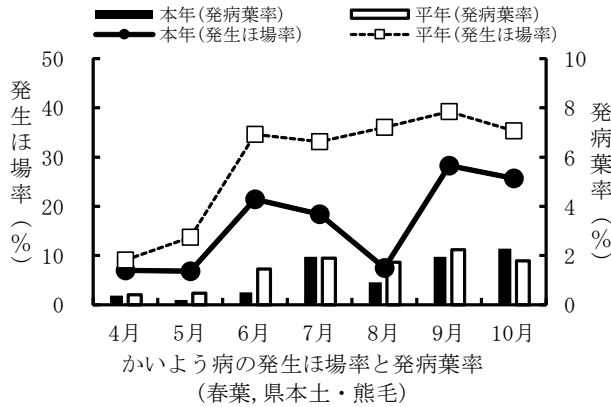
奄美地域(果実) やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	やや少
発生ほ場率	26% (平年 35%) : やや低い (-)	26% (平年 44%) : 低い (-)
発病率	2.3% (平年1.8%) : 並	1.9% (平年2.4%) : 並
		発生程度の高いほ場を認めた (+)



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	少	やや少
発生ほ場率	0% (平年 29%) : 少 (-)	0% (平年 17%) : やや低い (-)
発病率	0% (平年0.6%) : やや低い (-)	0% (平年0.3%) : やや低い (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 秋季に感染して翌春病斑を作る越冬病斑は伝染力が強いので、菌密度を低下させるため、発病した夏秋梢やミカンハモグリガの食害を受けた夏秋梢はせん除する。

(2) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや少
奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：少

発生ほ場率 8% (平年 31%)
：低い (-)
寄生葉率 0.3% (平年 3.3%)
：やや低い (-)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)
降水量：平年並みか少ない (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

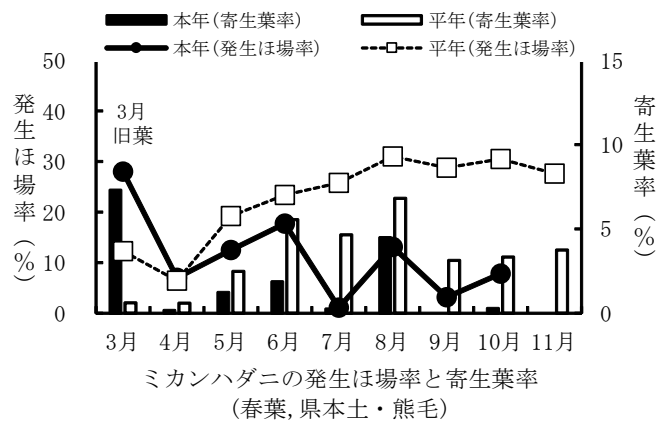
発生ほ場率 0% (平年 1%) : 並
寄生葉率 0% (平年 0.1%) : 並

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数0.5~1.0頭 (寄生葉率で30~40%) を目安に防除する。
(イ) 同一系統薬剤の使用は年1回とし、葉裏までかかるように丁寧に散布する。



(3) 果実吸蛾類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土・熊毛地域

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率 29% (平年 14%)
：高い (+)

(イ) 気象予報

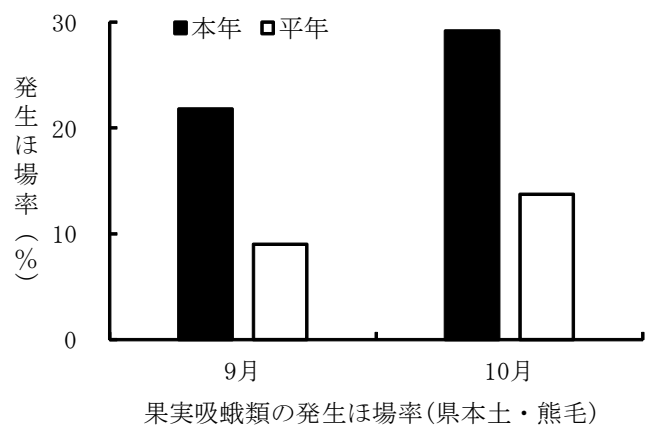
気温：高い (+)
降水量：平年並みか少ない (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 果実吸蛾類は果実を吸汁・加害し腐

敗落果させる。夜間に活動し果皮の薄い早生温州等に集まりやすい。

(イ) 網目5~10mmの防蛾網で被覆するほか、幼虫の食草となるアケビ、ムベ、アオツヅラフジ等を極力除去する。黄色忌避灯を用いる場合は、ほ場全体が2Lux以上の明るさになるように設置する。



防除に関する今月の留意事項

【カンキツ】

1. サビダニ類

- (1) 県内のほぼ全域に生息するリュウキュウミカンサビダニは、秋季以降も果実上で加害し続けるので、被害果を認めたら直ちに防除する。
- (2) 秋季に多発した樹では、翌年も同じ樹で発生する場合が多いので、防除に努める。

2. 貯蔵病害（青かび病，緑かび病，軸腐病）

収穫時の気温が高く降雨が多いと腐敗果が発生しやすい。なお、軸腐病の病原菌は黒点病と同じ菌であるため、黒点病の発生が多いほ場では注意する。

- (1) 貯蔵を要する普通温州や中晩柑類は収穫前に必ず防除する。
- (2) 防除薬剤は使用基準を厳守し、収穫予定日を想定し、収穫前日数に注意して選定する。
- (3) 収穫時には果実に傷をつけないように手袋を使用し、果梗部の二度切りは丁寧に行う。

【ナシ】

1. 黒星病

黒星病の病原菌は、11月に雨が多いと罹病葉から飛散する。花芽りん片に感染すると主に翌春の伝染源となるので、以下の点に注意して防除に努める。

- (1) 花芽りん片への感染を防止するため、10～11月に必ず2～3回防除する。
- (2) 落葉した罹病葉も伝染源となるので適正に処分する。

IV. 茶 樹

(1) カンザワハダニ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

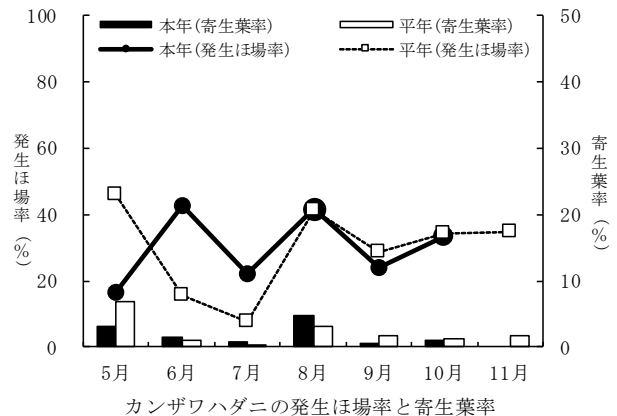
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率 33% (平年 34%)：並
寄生葉率 1.1% (平年 1.3%)：並

(イ) 気象予報

- 気温：高い (+)
- 降水量：平年並みか少ない (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 翌年の発生源となる越冬個体数を抑えるため、発生の多いほ場では11月中旬～下旬に防除する。
- (イ) 薬剤は、葉裏まで十分にかかるように散布する。



農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は、住宅地および畜舎に隣接するほ場や、無風の時、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は、巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は、果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い、本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし、過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。